

第7回

「未来を強くする子育てプロジェクト」のご紹介

「未来を強くする子育てプロジェクト」では、
「子育て支援活動の表彰」と「女性研究者への支援」の2つの公募事業を柱として、
すこやかな子育てと夢のある未来づくりを応援しています。



子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む個人・団体を募集します。地域の地道な活動にも着目し、ロールモデルとなりうる特徴的な子育て支援活動を表彰しています。価値のある活動の他地域への普及を促すことで、子育て環境を整備し、子育ての不安を払拭します。



女性研究者への支援

育児のため研究の継続が困難となっている女性研究者および、育児を行いながら研究を続けている女性研究者が、研究環境や生活環境を維持・継続するための助成金を支給します。人文・社会科学分野における萌芽的な研究の発展に期待する助成です。

目次

「未来を強くする子育てプロジェクト」のご紹介	02
ごあいさつ	03
講評	04
子育て支援活動の表彰	06
女性研究者への支援	28
第6回受賞者のご紹介	38

ごあいさつ

佐藤 義雄

住友生命保険相互会社
代表取締役社長



住友生命では、2007年からよりよい子育て環境の整備にむけ「未来を強くする子育てプロジェクト」に取り組んでおります。このたび7回目の表彰を迎え、これまでに支援を行った子育て支援活動は65組、女性研究者の皆さまは71名となりました。多くの皆さまのご理解とご協力に心より感謝申し上げます。

プロジェクトの回を重ねる中で、この取組みに対する共感や激励のお言葉をいただくことが少しずつ増えており、プロジェクトの成長に喜びを感じるとともに、社会が子育て支援を切に求めている現実と、私どもが果たしていくべき責任の重さに改めて気が引き締まる思いであります。

住友生命は、生命保険という商品を通じてお客さまとその大切なご家族の人生を支える役割を担っております。同時に、保険商品の保障の枠に留まらず、誰もが安心して子どもを産み育て、家族が笑顔で健やかに暮らせる社会づくりに貢献することが私どもの重要な使命のひとつである

という思いから、当社の社会貢献事業の柱としてこの「未来を強くする子育てプロジェクト」を実施しております。

子育てを取り巻く環境は、少子高齢化や核家族化、女性の社会進出などさまざまな要因によって大きく変化しています。育児と仕事の両立、孤独な子育てといった問題など、子育ての当事者だけでは解決できない課題も増えており、社会全体でいかに子育て世代を支援し、未来を担う子どもたちの育つ力を引き出していくかが重要となっています。

住友生命では、これからもこのプロジェクトを通じて、子育てを取り巻くさまざまな課題に立ち向かう皆さまを応援することで、日本全国に「子育て支援の輪」を拡げていきたいと願っています。そして、子どもたちの笑顔を守り、その未来を強くするための取組みを一層充実させてまいりたいと考えております。入賞者の皆さまには、この表彰を一つのきっかけに今後ますますのご活躍を心より祈念申し上げます。

選考結果

第7回「未来を強くする子育てプロジェクト」では、2013年7月から9月までの間、「子育て支援活動の表彰」「女性研究者への支援」の2部門の募集をいたしました。「子育て支援活動の表彰」には160組、「女性研究者への支援」には126名のご応募をいただきました。選考委員による審査を経て各部門の受賞者が決定しました。



子育て支援活動の表彰

表彰数 **16** 組
(応募数160組)

- 文部科学大臣賞／未来大賞の1組に授与
- 厚生労働大臣賞／未来大賞の1組に授与
- 未来大賞／2組
- 未来賞／10組
- 震災復興応援特別賞／4組



女性研究者への支援

表彰数 **11** 名
(応募数126名)

- スミセイ女性研究者奨励賞／11名

講 評

「未来を強くする子育てプロジェクト」選考委員



[選考委員長] **汐見 稔幸** 白梅学園大学学長、東京大学名誉教授

国が子育て支援に力を入れ始め、さまざまな活動を展開しつつある現在は、次のステップに向けた過渡期にあるように思われます。そのような中で今回ご応募いただいた、子どもの貧困や地域の高齢化といった今日的な課題に対応した子育て支援活動は、まさに新たな時代に先鞭をつける取組みとして大いに期待が持てるものでした。

一方、女性研究者のご応募からは、研究の質の高まりが窺えました。自らの着想を優れた研究テーマへと昇華し、それについて誇りを持って取り組む姿は、同じ研究者として心強い限りです。こうした気概ある研究者の方々に支援させていただくことで、研究内容が広く注目され、その成果が学問の世界に還元されることを期待しています。



[選考委員] **大日向 雅美** 恵泉女学園大学大学院教授

今回で「スミセイ女性研究者奨励賞」の選考も7回目を数えますが、年々、応募いただく研究内容はレベルアップし、また企画力も増しているように感じられます。今回の応募者の中には、過去に惜しくも受賞を逃された方で、その後も努力を続けて新たに学位を取得された方や、研究計画をさらに磨いたうえで再度応募してこられた方などいて、女性研究者の底力のようなものをあらためて強く実感しました。

子育て世代を取り巻く環境には今なお厳しいものがあります。ご家族の協力がなかなか得られない子育て環境や、経済的に不安定な研究環境の中にあってもなお、困難に負けずに育児と研究の両立を目指す女性研究者の意志の強さと逞しさに、敬服いたしました。





[選考委員] **奥山 千鶴子** 特定非営利活動法人びーのびーの理事長

子育て支援の内容や担い手層の拡大など、さまざまな面で活動の広がりを実感しました。たとえば、育児支援に加えて母親の就労支援も担う団体や地域資源を活かしたユニークな活動を行う団体、そのほかにも子育て支援に日常的に取り組んでいる団体だけでなく、子どもや子育て支援に関わる業界団体や商店街などからも数多くご応募いただきました。そして今回、東日本大震災の被災地復興・被災者支援に尽力する団体を表彰する賞を新設したこともあり、既存の制度や子育て環境の枠組みを超えた支援のあり方を示す活動も見られ、その力強さがとても印象的でした。

今回の受賞を通じて、こうした子育て支援活動の広がりがますます大きなものになっていくことを願っています。



[選考委員] **米田 佐知子** 子どもの未来サポートオフィス代表

特別なニーズを持った子どもたちの豊かな育ちを助ける活動や、伝統文化を後世に受け継いでいくための活動など、各地の地域性をふまえた特色ある子育て支援活動がたいへん新鮮に感じられました。

かつては子育て支援というと、母親同士の相互扶助的なものが中心でしたが、今回の応募を拝見しますと、人が生きていくうえで何が大切なのかを活動目的の根幹に据えながら、子育てを通じて人と人がつながることで、自分たちの手で地域をより良いものにしていくことを目指す活動が増えてきているように思います。常々、「子どもの育ちについて考えることは社会全体について考えること」との思いを抱いておりましたが、その思いをあらためて強くした今回の選考でした。



[選考委員] **橋本 雅博** 住友生命保険相互会社 代表取締役専務執行役員

今回、子育て支援活動の表彰部門に「震災復興応援特別賞」を新たに創設させていただきました。新たな賞ということもあり、選考では大変白熱した議論となり、結果として表彰数を増やしてご支援させていただくこととしました。また、「スミセイ女性研究者奨励賞」の選考でも、応募書類からにじみ出る研究への熱意にぜひ表彰者を増やそうということになり、表彰者を増やしております。

7回目を迎え、子育て支援団体や女性研究者の皆さまがこのプロジェクトにかけるご期待の高さがさらに増してきているように感じました。複数回応募いただいている団体や女性研究者の方も多くみられましたが、その活動や研究の着実な進歩や力強さに感動を覚えた今回の選考でした。

「子育て支援活動受賞団体」のご紹介

文部科学大臣賞・未来大賞



特定非営利活動法人
沖縄ハンズオン
NPO

エデュケーションプログラムを
通し沖縄の文化を次世代の
子どもたちへ継承する活動

p.08

厚生労働大臣賞・未来大賞



特定非営利活動法人
Mama's Cafe

ママたちのスキルを活かして
子どもと一緒に働ける場所を作る
コミュニティビジネスを展開

p.10

未来賞



Earth Babies

地域の日本人・外国人ママたちが
お互いの文化を尊重し
一緒になって子育てを楽しむ活動

p.12

未来賞



あそびのきち
おひさま

どんな子どもでも受け入れる
異年齢交流の場。子どもの
「今の幸せ」を応援する活動

p.13

未来賞



特定非営利活動法人
いこま山の子会
「いこま山のようちえん」

山の雑木林や棚田を活用して、
子どもたちの自由教育を
実践する「ようちえん」

p.14

未来賞



特定非営利活動法人
輝け「いのち」
ネットワーク

都市部の児童養護施設の
子どもたちを、自然豊かな地域で
受け入れる活動

p.15

未 来 賞



Kacotam

子どもたち一人ひとりに
寄り添った、学ぶことを
楽しむための学習支援活動

p.16

未 来 賞



特定非営利活動法人
Japan Hair
Donation & Charity

髪の毛を失った子どもたちを
応援するために、ヘアウィッグを
制作し無償提供する活動

p.17

未 来 賞



NPO法人
ホスピタル・プレイ協会
すべての子どもの
遊びと支援を考える会

『遊び』を通じた
病气や障がいのある子どもたち
への支援活動

p.18

未 来 賞



パパちから応援隊

“夫婦力・育児力・地域力”アップ
のための夫婦で参加する
ワークショップ型講座の開催と
プログラム内容の研究

p.19

未 来 賞



播磨マリンクルー

海で遊ぶ機会が少なくなった
子どもたちのために、海を体験
できるプログラムを提供する活動

p.20

未 来 賞



守山商工会青年部

子どもたちの自主性を重んじた、
子どもたちが主役の
仮想商店街を開催

p.21

特定非営利活動法人 沖縄ハンズオンNPO

沖縄県沖縄市・北谷町 代表者:安慶名 達也(トゥーバかつちん)



～ 親先祖の生きた知恵体感～
(ウヤファーフジ)

沖縄ハンズオン
しまくとぅばエジュテーム活動

活動内容

消滅危機言語である「しまくとぅば」を次世代の子どもたちに継承するための、エジュテーム(教育・エンターテーム)活動を行っています

受賞の言葉

このたびは、文部科学大臣賞という大賞を頂きイッペーニフェーデービル(ありがとうございます)。私たちに『しまくとぅば』の心得を教えてくださいました今は亡き恩師の先生と、現在世界中で言葉の文化復興を願うマイノリティ民族の方々やすべての子どもたちに、この受賞の喜びと『ナンクルナイサ(なんとかなるさ)』の精神を共有したいと考えています。





沖縄の伝統文化を守る 「しまくとぅば」の継承

多世代交流型の生涯学習プログラムの企画・運営を行っている私たちが、現在力を注いでいるのは、2009年ユネスコによって消滅危機言語に指定された琉球諸語「しまくとぅば」の復活と普及です。独自の活動軌跡ノート（ポートフォリオ）を、エジュテメント活動に活用し、常に参加者の実績をプログラムにフィードバックできる工夫をしています。

沖縄には、三線・琉歌・組踊り・エイサーなど、地域伝統の文化がいくつもあります。これらはすべて「しまくとぅば」によって行われています。しかし残念なことに、現在「しまくとぅば」を話せない世代が増加し、その言葉とともに、沖縄の伝統文化までもが廃れてしまうことが危惧されています。そこで、私たちは、2006年に沖縄県が「しまくとぅばの日」を制定したことを契機に、沖縄における重要な文化的アイデンティティである「しまくとぅば」を後世に伝承するための活動を開始しました。

「しまくとぅば」の魅力 多くの人たちに知ってもらうために

「しまくとぅば」の普及のための取組みのひとつに、郷土史をベースにした紙芝居の制作・上演があります。子どもたちが地域の民話や神話発祥地を訪問し、それらを紙芝居にまとめ、紙芝居型演劇オペレッタとして披露するこの活動プログラムは、老人ホームなどからの上演依頼も多く大盛況です。

また、私たちの活動に共感する団体や企業も、この取組みに理解を示し、活動の認知が広がっています。

さらに、より多くの人たちに「しまくとぅば」の魅力を知ってもらうために、地元FMラジオ局の協力のもと、沖縄の歴史や文化をテーマにしたラジオ番組の制作・放送も行っています。

言葉を学ぶことで 琉球の先人たちの生き方も学ぶ

「しまくとぅば」には、年上の人に対する敬意や感謝の気持ちをあらわす言葉が数多くあり、そうした言葉を通じて、人との接し方や礼儀を学ぶことができました。言葉とともに沖縄の肝心（チムグル）を学び後世に伝えていくことは、ウチナーンチュ（沖縄人）のみならず、沖縄県に在住する方々との志縁にも繋がり、人としてあるべき生き方を受け継いでいくことでもあると思います。

名称 : 特定非営利活動法人
沖縄ハンズオン NPO

活動開始 : 2002年2月

スタッフ : 10名

連絡先 : 〒904-2165
沖縄県沖縄市宮里3丁目17番25号
TEL.098-936-6868

特定非営利活動法人 Mama's Cafe

岐阜県多治見市 代表者：山本 博子



現役子育てママが主役となって、 コミュニティビジネスを展開中

活動内容

「子どもと一緒に働ける！」をコンセプトに
コミュニティカフェ2店舗の運営ほか、
7つの事業を展開しています

受賞の言葉

地方都市において身の丈で始めた私たちの活動が、このような賞を受賞できて感謝の気持ちでいっぱいです。13年の活動の中で感じることは、「子育て支援のニーズも時代とともに変化している」ということです。今後も「変化への対応」を心がけ、「今」のママのニーズに応える活動をしていきたいと思っています。





「ないものは、自分たちの手でつくる」 という発想

私たちの活動の前身は、同じ年齢の子どもを持つ5名のママたちで立ち上げた育児サークルです。活動はとても順調で、一時はメンバーの人数も60名を超えました。その後、不況の影響などもあって自身の就労のために退会を希望する参加者も徐々に増加しましたが、小さな子どもを持つお母さんたちを雇ってくれるところはなかなかありませんでした。また、求職中の段階では子どもを保育園に預けることもできないのです。

そこで、「雇ってくれるところも預かってくれるところもないのなら、子どもを連れて働ける場を自分たちの手でつくろう」と始めたのがMama's Cafeです。通常の子育て支援にとどまらず母親の就労支援にまで踏み込んだサポートを行っている点が、私たちの活動のユニークなところだと思います。

子育てママによる、 子育てママのためのカフェ

当初はリサイクルショップの一角を借りて営業を開始したMama's Cafeも、現在は2号店をオープンして、おかげさまで多くの方にご来店いただいています。特に子育て世代のお客さんのご利用が多く、乳幼児を連れてお母さんたち同士の交流の場にもなっているようです。

一方、私たちにとっては貴重な情報収集の場でもあります。Mama's Cafeの発案もそうですが、子育て中のお母さんたちにとっての「あったらいい

な!」を形にしていく私たちの活動において、当事者の生の声に耳を傾けることはとても大事なことです。そうした声から、子育てサロンを企画・運営するイベント事業や、地域における子育て相互援助のコーディネートを行うファミリーサポート事業などのさまざまな活動が誕生しています。

社会貢献を目指したブランド 「mamacolor」の立ち上げ

Mama's Cafeでは、ママたちがつくるハンドメイド商品の販売も行っています。その中に「mamacolor(ママコロ)」のロゴが入った商品がありますが、こちらは市民ファンドと協力で立ち上げた寄付つき商品のブランドで、売上の一部が、子育て支援のための基金に寄付される仕組みになっています。こうした社会貢献活動も、母親たちの社会参画を目標に掲げる私たちにとっては重要な活動のひとつです。

今後は、多治見だけでなく全国の子育てママにも広く参加していただけるように、こうしたハンドメイド商品を販売するためのネットショップを立ち上げたいと思っています。

名称 : 特定非営利活動法人 Mama's Cafe

活動開始 : 2001年12月

スタッフ : 20名

連絡先 : 〒507-0041

岐阜県多治見市太平町2-39-1

TEL.0572-25-2091

未来賞

Earth Babies

岐阜県可児市 代表者：池辺 恭子



地域に暮らす外国人と日本人が文化や習慣の違いを体験しながら、一緒に子育てを楽しんでいます

活動内容

地域の外国人・日本人ママがアイデアを出し合いながら、交流会やさまざまな教室を開催しています

日本人ママと外国人ママの交流の場

岐阜県可児市は、外国人居住者の割合が人口の約5%を占めます。子育て世代の方たちにとっては、日本語や日本の風習が理解できずに、出産や育児、子どもを幼稚園や学校に通わせる際などに日本人以上に戸惑い、苦勞することが少なくありません。そうした問題を解決すべく、日本人ママと外国人ママとの交流を通じて助け合える関係づくりを目指して立ち上げたのが、多文化共生育児サークル「Earth Babies」です。

文化の違いを認めて、ともに子育てを楽しむ

私たちの活動の目的は一時的な子育て支援ではなく、日本人と外国人が一緒になって子育てを楽しむこと、そして異なる文化をともに学び合うことにあります。そのため、日本人ママたちが子どもの入園の準備をお手伝いするイベントもあれば、逆に外国人ママたちが自国の文化を紹介するイベントなどもあり、国の違いを越えた助け合いや交流

が日々行われています。ここが通常の子育てサークルとは少し異なる点かもしれません。

より積極的な社会参加のために

地域住民として外国人、日本人がお互いに尊重し合えるような関係が自然と生まれるよう、これからも交流できる機会を提供していきたいと思えます。そんな交流の中でそれぞれが持つスキルや言語力などの特技を活かし、子育て中のママたちにも積極的に社会参加ができるようなサポートを行っていきたくと考えています。

名称 : Earth Babies

活動開始 : 2010年12月

スタッフ : 10名

連絡先 : 〒509-0230
岐阜県可児市星見台1-85
TEL.080-5265-1904

受賞の言葉

私たちのような若い小さなグループが賞をいただけたことに驚いています。子どもと一しょの活動のため大変ですが、活動してきたメンバーの地域外国人、日本人ママさんたちの多文化共生、子育てへの熱い思いに対して賞をいただけたのだと思います。私たちの活動を温かく見守ってくださった可児市行政、地域の皆さまへ深くお礼を申し上げます。

未来賞

あそびのきち おひさま

岡山県総社市 代表者：田中 智子



「あそびのきち」
それは年齢の異なる子どもたちが
一緒に遊び学ぶための場所です

活動内容

異年齢の子どもたちがともに群れ遊び生活をする中で、障がい児も含め子どもたちのキラリと輝く成長を応援する活動をしています

子どもたちが自由に遊べる場所をつくりたい

保育所の跡地を利用して、子どもたちに遊びと学びの場を提供しています。祖父母と同居する家庭が多い地域特性から、活動開始当初は周囲から「ニーズはあまりないのではないか」と言われていました。しかし、ふたを開けてみると正反対で、毎日多くの方たちにご利用いただいています。それは、ここが単なる学童保育の場ではなく、地域の子どもたちにとって格好の遊び場であり、お母さんたちにとっては交流と息抜きの場にもなっているからだと思えます。

大家族のような雰囲気

午前中には未就園児、午後からは幼稚園児、そして放課後になると小学生や中学生といった具合に、年齢の異なる子どもたちが次々と集まってきます。私たちスタッフが間に入らなくても、上級生がリーダーシップを発揮して、下級生に遊びを教えた

り、面倒を見たりしてくれています。異年齢の子どもたちが一緒に過ごすことで生まれる大家族のような雰囲気もまた、「あそびのきち」の大きな魅力のひとつです。

障がいのある子もいない子も一緒に

ここでは、年齢の差も障がいの有無も関係なく、みんな一緒になって遊び学びます。そうすることによって子どもたちの心には、お互いの違いを認め合いながら、相手を思いやる優しい気持ちが自然と育まれています。

名称 : あそびのきち おひさま

活動開始 : 2003年11月

スタッフ : 9名

連絡先 : 〒719-1311
岡山県総社市美袋1584-1
TEL.0866-99-2850

受賞の言葉

活動開始から10年という年月がたち、異年齢の子どもたちが外で自由な群れ遊びを通して共に喜び、悲しみ、感動を共にすることで、仲間を大切に思いやりの心が育っています。ありのままの自分を友達同士認め合い、受け入れ合える絆があるチームおひさまを、認めてくださった住友生命さんに感謝しています。

未来賞

特定非営利活動法人 いこま山の子会「いこま山のようちえん」

奈良県生駒市 代表者：紀村 典子



自然豊かな生駒の山の中で、
自由保育・自然保育を行う
園舎のない“ようちえん”です

活動内容

保育理念である「自由な精神を持つ子どもを育てる」ために自由保育・自然保育を実現し、保護者と共同運営をしている、“ようちえん”です

いつの間にか心も体もたくましく

子どもたちは山の中で五感をフルに使って自由に遊び、そしてそこから多くのことを学びます。野外だからといって、天候や季節によって活動を制限することはしていません。雨の日でも冬の寒い日でも、むしろ子どもたちは喜んで元気に外を走り回っています。また、みんなで行う自然遊びを通じて子どもたちは、体力だけでなく想像力や協調性も育むことができます。

自由な精神の開放

もう一つの大きな特徴が自由保育です。カリキュラムをあえて設定せず、日々の遊びや行事も子どもたちが考え、それを保育スタッフがサポートします。

もめ事が起きても、できるだけ自分たちで解決するよう見守ります。悪いとされがちな本当の気持ちを表現すること、さらにそれを受け入れてもらえることにより、自尊感情や問題解決能力が育つのです。また、保護者が運営に参加することで、家庭で

も自由教育を実践できるようになります。生きていく上で必要な力を身につけることも、自由保育・自然保育の大事な目的のひとつです。

行政や地元団体の協力を得て運営

自然の中で行う“ようちえん”活動では、土地の所有者であるお寺や行政、地域で活動が続いている各種団体のご支援とご協力のもと、継続性を持った活動ができています。未来を担う子どもたちのため、子どもを取り巻く人々が協力し、高め合っていける関係性こそが、「いこま山のようちえん」の理想的な形だと考えています。

名称 : 特定非営利活動法人
いこま山の子会「いこま山のようちえん」

活動開始 : 2008年4月

スタッフ : 7名(うち有資格者6名)

連絡先 : 〒630-0255
奈良県生駒市山崎新町1-40
TEL.0743-75-6286

受賞の言葉

生きる力を育むため、活動してきたことを認めていただき、本当にうれしく思います。

生駒山に抱かれ、子どもたちが毎日泣き笑い、のびのびと生きられることを大切に、ずっと続けていきたいです。子どもが大人になったとき、帰って来られるふるさとや仲間でいられるように、これからもがんばっていきたいと思います。

未来賞

特定非営利活動法人 輝け「いのち」ネットワーク

岩手県和賀郡西和賀町 代表者：高橋 和子



児童養護施設の子どもたちを、
家族ぐるみ・地域ぐるみで
迎え入れています

活動内容

児童養護施設の子どもたちに、
家庭や地域での生活を、より多く経験して
もらうための活動をしています

家庭や地域での生活を
より多く体験してもらうために

西和賀町では、盛岡市にある児童養護施設の子どもたちに、夏休みを利用した体験合宿の場を長く提供してきました。その中で、家庭や地域での生活をより多く体験してもらいたいと考えようになりました。そこで5年ほど前から、体験合宿をホームステイという形に発展させて、子どもたちが家庭で生活する機会を提供しています。

慣れない雪かきも農作業も
率先してお手伝い

ホームステイに加えて、施設の職員と一緒に古民家に宿泊しながら地域行事に参加する「ファミリーホーム」などの取組みも行っています。最初は遠慮がちだった子どもたちも、いつしか雪かきや農作業を率先して手伝ってくれるようになるなど、都会ではなかなかできない経験を通して子どもたちがのびやかに成長してくれたらうれしいです。

地域の人もすごく楽しみにしています

ホームステイやファミリーホームを楽しみにしているのは、参加する子どもたちばかりではありません。受け入れる側もとても楽しみにしています。高齢化が進む中、子どもたちがやってくる時期は、町の雰囲気も明るくなります。地域の高齢者にとっては長年の生活の知恵や技術を子どもたちに伝えることが生きがいにもつながっているようです。

名称 : 特定非営利活動法人
輝け「いのち」ネットワーク

活動開始 : 2008年5月

スタッフ : 15名

連絡先 : 〒029-5617
岩手県和賀郡西和賀町沢内長瀬野19-49-16
TEL.0197-85-3273

受賞の言葉

「いのち」が軽んじられる風潮もある中で、西和賀町(旧沢内村)では半世紀も前から社会的に弱い立場の人、ハンディを持っている人の生命と暮らしを支えてきました。その流れの中で「子どものいのちが輝く活動」を中心に行ってきたことが認められ、大変うれしく思います。これを機にさらに社会的養護を必要とする子どもたちへの支援を続けていきたいと思っています。

未来賞

Kacotam

北海道札幌市 代表者：高橋 勇造



**「考え、行動して、楽しむ」
それが、私たちの学習支援の
モットーです**

活動内容

経済的理由や家庭環境などによって十分な学習環境にない子どもたちを対象に、楽しい学びの場を提供しています

子どもたちに十分な学習の機会を提供したい

十分な学習環境にない児童養護施設の子どもたちや、ひとり親家庭・生活保護世帯の子どもたちを対象にした学習支援を行っています。当初は個人で運営していたこの活動も、現在は多くのボランティアの参加を得るとともに、地域の子育て支援団体などとも連携を図ることで、札幌市内に4ヶ所の学習教室を構えるまでになりました。一人では限界を感じてしまうことでも、多くの人が力を合わせれば実現できることを実感しています。

多様な大人にふれてほしいから 「先生」の経歴はさまざまです

私たちの活動の特徴のひとつに「メンバーの多様性」があります。先生役を務めるのは、大学生・大学院生から社会人まで、専攻も職業も実にさまざまです。子どもたちには親や教師、施設のスタッフだけでなく、こうした多様な大人たちと日々接することで知見を広げ、コミュニケーション能力

をはじめとした社会性も身につけてもらいたいと考えています。

成績がよくなることよりも大切なこと

学習教室に最初に通い始めた第一期生全員が無事に高校合格を果たすなど、支援の成果は目に見える形で表れ始めています。とは言っても進学塾ではないので、私たちは成績の向上だけを目指していません。むしろ子どもたちには、この教室に通うことで「学びをいかに楽しむか」を知ってもらいたいと思っています。進学率よりも、学習に対する興味や意欲を高めていくことが、私たちの活動の目標です。

名称 : Kacotam

活動開始 : 2012年1月

スタッフ : 60名

連絡先 : 〒001-0922

北海道札幌市北区新川2条5丁目1-13

TEL.090-9750-6064

受賞の言葉

この度はこのような賞をいただき、ありがとうございます。私たちはまだまだ団体としては未熟ですが、学習支援への社会的関心の高まりと今後の私たちの活動への期待が後押しをしてくれた受賞だと考えています。これからも必要としている子どもたちに、学びの場を提供できるよう一歩ずつ着実に歩んでまいります。

未来賞

特定非営利活動法人 Japan Hair Donation & Charity

大阪府大阪市 代表者：浅野 憲真



寄付で集まった毛髪を使って
小児用ウィッグを制作
髪を失った子どもたちに
無償で提供しています

活動内容

病気などによって髪を失った18歳未満の子どもたちに、全国から寄付された毛髪を使って制作した「Onewig」を無償で提供しています

ヘアドネーションを推進する 日本で唯一の団体

団体名にある「ヘアドネーション」というのは、髪の毛の寄付のこと。寄付された毛髪はウィッグへと生まれ変わり、病気などによって髪を失った子どもたちに提供されます。寄付の受付から、小児用ウィッグの制作、そしてお渡しする際のスタイリングまでを一貫して、無償で行っている団体は世界でも珍しく、日本では私たちだけだと思います。

本物の髪の毛を集めるため 美容室のネットワークを構築しています

通常流通している化学繊維などを使用した小児用ウィッグは、見た目にもかつらであることがわかりやすく、子ども同士のいじめの原因などになってしまうこともあるようです。そこで私たちは、よりその人らしさを表現することができる人毛100%のウィッグを制作するために、活動に賛同してくれる美容室を広く募り、毛髪の寄付のお手伝いを願

っています。全国各地に広がりつつあるこのネットワークをより充実したものにしていきたいことが、私たちの当面の目標です。

ヘアドネーションという文化を創りたい

欧米諸国ではごく当たり前に行われている髪の毛の寄付ですが、日本での認知度や理解度はまだ十分とは言えません。ウィッグを待ち望んでいる子どもたちが大勢いる一方で、残念ながら供給が追いついていないというのが現状です。今以上に多くの方たちにご賛同・ご協力いただくことで私たちの活動の輪を広げ、ヘアドネーションという素晴らしい文化を日本にもぜひ定着させたいと考えています。

名称 : 特定非営利活動法人
Japan Hair Donation & Charity
愛称:NPO法人 JHDAC(ジャーダック)

活動開始 : 2008年8月

スタッフ : 5名

連絡先 : 〒531-0072
大阪府大阪市北区豊崎3-8-18-2F
TEL.050-3357-3860

受賞の言葉

病気や事故、遺伝的な要因から髪に悩みを抱く子どもたちがたくさんいます。しかし、子ども向けの医療用ウィッグは決して安価とは言えず、諦める方もたくさんいます。この受賞を機に、より多くの方に私たちの活動を知っていただき、一人でも多くの子どもたちの未来が明るく輝くように、と願ってやみません。

未来賞

NPO法人 ホスピタル・プレイ協会 すべての子どもの遊びと支援を考える会

静岡県静岡市 代表者:松平 千佳



遊びと医療の融合による子どもに やさしい医療の実現を目指しています

活動内容

遊びを通じて病気や障がいのある子どもたちを支援するため、専門スタッフの育成や遊びのワークショップ、訪問活動を実施しています

「遊び」の力で病気の子どもたちを元気に

子どもが成長する過程において「遊び」は必要不可欠な活動です。しかし病児や障がい児の場合、病気の治療や入院生活中であることを理由に、遊びの重要性が軽視される傾向にあります。私たちはむしろ「病気だからこそ遊びが必要」と考え、病気や障がいを抱える子どもたちを遊びによって支援する「ホスピタル・プレイ」の実践および普及・啓発に努めています。

治療の場面でも「遊び」は重要な要素です

例えば子どもの採血というと、体を押さえつけて無理矢理行われることも珍しくありません。これでは採血が恐怖となり、暴れる子どもを更に強い力で押さえつけるといった悪循環に陥ってしまいます。これに対してホスピタル・プレイを実践している病院では、遊びを通じて子どもたちが感じる恐怖心や痛みを軽減し、治療に対して協力的な姿勢を引き出すことができます。遊びを活用したチャイルド・フレンドリーな医療というのは、実は病院の側にとっても大きなメリットがあるのです。

ホスピタル・プレイの専門家を育てたい

ただし、ホスピタル・プレイの意義や考え方はいまだ広く認知されているとは言えません。そこで私たちは、ホスピタル・プレイ・スペシャリスト(HPS)の養成と社会への啓発活動に力を入れ、ホスピタル・プレイの更なる発展を担う専門家人材の社会への拡大を図っています。これまでに100名以上の方が講座を修了し、各地で精力的に活動を行っています。

名称 : NPO法人 ホスピタル・プレイ協会
すべての子どもの遊びと支援を考える会

活動開始 : 2008年6月

スタッフ : 11名

連絡先 : 〒420-0885
静岡県静岡市葵区大岩町9番2号
TEL.054-202-2652

受賞の言葉

受賞できたことを光栄に思います。私たちホスピタル・プレイに関わる者は、病気の子どもたちから大切なことを教えてもらいながら活動を進めてきました。今後も遊びの力を医療現場で最大限活かせるよう、スキルの向上に努めるとともに、より多くの人にホスピタル・プレイの重要性を理解してもらえるよう普及活動に力を入れていきます。

未来賞

パパちから応援隊

奈良県生駒郡平群町 代表者：赤松 邦子



**夫婦と赤ちゃんで参加し
子どもとの遊び方を学んだり、
ゲームやワークシートを通して他者と
交流したりするワークショップ型講座
を開催しています**

活動内容

母親への支援経験から、父親への直接的な支援が必要と結成。「夫婦力・育児力・地域力」アップのための体験学習プログラム開発と講座の開催に奮闘しています

「パパセミナー」で夫婦力アップ

母親向けの子育て支援活動を長く展開してきましたが、育児以上に夫に対してストレスを溜めている母親が多いことがわかりました。結婚や子育てで生活の中で、お互いの存在を大切に思いながらも、夫婦間の意思疎通が十分に図れていないようです。そこで夫婦間のコミュニケーションを促し、「夫婦力アップ」を目的に、夫婦が揃って参加する「パパセミナー」を開催しています。

体験することでわかる 人それぞれの子育て

「パパセミナー」では、子どもとの接し方や遊び方などを学ぶだけでなく、「自分の気持ち」「相手の気持ち」にスポットを当てたプログラムも提供しています。参加者が日頃思っていることや感じていることを率直に語り合い共有する過程で、多様な夫婦

のあり方や子育ての方法があることの“気づき”に満ちたプログラムが好評です。

お父さんたちのネットワークづくりのために

母親が子育てを通じて地域と繋がりを持つことができるのに対して、父親はそうした機会になかなか恵まれません。その意味では、子どもが生まれた直後というのは、父親が地域と繋がりを持つ上で絶好のチャンスだと思っています。私たちの「パパセミナー」は、誰でも実践できるように内容を標準化していますので、他地域への展開も容易です。そんな「パパセミナー」が父親同士、そして家族同士、地域ぐるみで子どもを育てる気運づくりの一助になれば幸いです。

名称 : パパちから応援隊

活動開始 : 2009年4月

スタッフ : 17名

連絡先 : 〒636-0943
奈良県生駒郡平群町椿台3-10-13
TEL.0745-45-6774

受賞の言葉

NPO法人設立認証申請と併せたような受賞はうれし
い限りです。これからの社会を担う子どもたちが健全
に育つためには、夫婦力・育児力・地域力アップは大き
な課題です。それを実現するために私たちの活動をより
充実させていきたいと考えています。

未来賞

播磨マリングルー

兵庫県高砂市 代表者:吉政 静夫

**海の魅力を多くの子どもたちに
伝えたい！
「来て・見て・さわれる」体験型の
自然学習を行っています**

活動内容

地元漁師さんの協力のもと、獲れたての魚介類を生きたまま保育園・幼稚園や小学校に持ち込み、子どもたちに触れて体感してもらう活動です。その他、海辺での体験型地引網や、アオサの回収もやっています

地元の海の魅力を知ってもらいたい

兵庫県高砂市の南側には播磨灘が広がります。しかし海岸線には工場が立ち並んでいて、近くに海がありながら、地元の子供たちはそこに暮らす多様な生き物に親しむ機会をほとんど持てずにいました。そこで、海の魅力を知ってもらうために始めたのが「出前水族館」です。日常生活の中ではなかなか目にすることのない生きた魚やタコなどを前にして、子どもたちはみな大はしゃぎ。幼稚園や小学校から「うちにも来てほしい」という依頼が後を絶ちません。

エコやグリーンも組み合わせた活動内容に

当初は魚を見せるために、子どもたちを船に乗せて沖まで出ていましたが、船酔いする子が続出。そこで現在は、地元の漁師の協力を得て地引網体験に力を入れています。また地引網体験とセットで、



浜辺の清掃作業を兼ねてアオサの回収も行っています。堆肥として資源利用が可能なアオサの回収作業には環境教育としての側面もありますので、今後も継続して行っていきたいと考えています。

子どもたちが海で学ぶ機会を 全国に広めたい

日本は豊かな海に囲まれた島国です。しかし近くに海がありながら、海で遊び学ぶ機会を持ってない子どもたちは大勢いて、これはもったいないことだと思います。「出前水族館」のプログラムは、他の地域でも実践可能なものです。目指すところは「感じ取ってもらう教育」。私たちの取組みが広く知られることで、多くの子どもたちに自然体験の機会が供されることを願っています。

名称 : 播磨マリングルー

活動開始 : 2003年4月

スタッフ : 20名

連絡先 : 〒676-0012
兵庫県高砂市荒井町中新町8-13
TEL.079-443-7263

受賞の言葉

今年で平均年齢71歳になる高齢者グループが、約10年間この活動を続けてこられ、今でもみんな元気でいられるのも、ゆく先々で子どもたちの歓喜にエネルギーをもらい続けてきたからです。今回このような賞をいただき、今後の励みになります。ありがとうございました。

未来賞

守山商工会青年部

愛知県名古屋市 代表者：横井 寿史



**「子ども商店街＝
子育て支援＋地域活性化」
子どもたちの笑顔があふれる
安全で楽しい町を目指して**

活動内容

地域の小中学生を対象に、ワークショップや実際の仕入れ・販売体験を通じて、商売の大変さや楽しさを学んでもらっています

**子どもたちの元気が
地域の活性化につながる**

地元の若手経営者を中心に構成された私たち守山商工会青年部は、地域に今ひとつ活気がない理由は子どもたちに元気が足りていないからではないかと考えました。そこで、子どもたちが楽しく元気になるイベントとして、商工会ならではの発想で思いついたのが「子ども商店街」です。子どもたちが自ら、お店を企画し運営するこの試みは大人気となり、定員の倍以上もの応募をいただくイベントになっています。

企画も運営も子どもたち自身の手で

参加者はグループごとに、それぞれお店のアイデアを出し合います。青年部のメンバーも調整役として加わりますが、子どもたちの自主性を尊重するため、口を挟むことはほとんどありません。仕入れの方法や売価、そして売上目標まで、すべてを決める

のは子どもたち自身。時にはグループ内で意見が分かれることもありますが、みんなで話し合っ決めていくこともまた良い勉強になります。

地域で子どもの成長を見守る町にしたい

「子ども商店街」の開催を通じて副次的な効果も生まれています。このイベントをきっかけにして、参加した子どもたちと青年部のメンバーが親しくなり、普段町で会ったときにも自然と挨拶や会話が交わされるようになりました。地域の大人と子どもがみな顔なじみとなり、まさに地域の目で子どもたちの成長を見守ることができる。そんな町を目指してこれからも活動を続けていきたいと思っています。

名称：守山商工会青年部

活動開始：2008年9月

スタッフ：33名

連絡先：〒463-0067
愛知県名古屋市守山区守山2-8-54
TEL.052-791-2500

受賞の言葉

このような賞をいただき本当に光栄に感じております。地域の繋がりが薄れていると言われる昨今、私たちのような地域に根差す商工業者が、町を活性化するために何ができるかを考えたとき、今回の子ども商店街という企画が生まれました。「子どもの元気はまちの元気」をキーワードに、今後も子どもたちとともに地域のためにできることを考えて活動してまいりたいと思います。

子育て支援活動の表彰 「震災復興応援特別賞」

「未来を強くする子育てプロジェクト」では、東日本大震災の発生後、少しでもお役に立ちたいという思いから、すみやかに、被災した子どもや子育て中の親などのための支援活動を行う56団体に一律20万円、総額1,120万円の助成を緊急支援プログラムとして実施いたしました。

東日本大震災の発生から約3年が経過しましたが、本格的な復興までにはまだまだ時間がかかると見られています。そうしたなかで、必要とされる支援内容は、中長期的な視点を持ち、被災された方々が自ら立ち上がる力を応援する活動へと徐々に変化してきているように思います。

被災地の子どもたちのために、「未来を強くする子育てプロジェクト」では「震災復興応援特別賞」を創設し、復興にむけた子育て支援活動を表彰させていただきます。この賞はこれまでの活動の実績だけでなく、今後の活動への想いをこめて選考させていただきました。

受賞団体のご紹介

震災復興応援特別賞



特定非営利活動法人 移動保育プロジェクト

子どもたちを放射線量の
高い地域から低い地域に
移動させて保育を実施

p.23

震災復興応援特別賞



一般社団法人 にこにこサポート

地域のお母さんたちの
スキルを活かして、
ベビーシッターや
託児などの事業を展開

p.24

震災復興応援特別賞



Bond Born café プロジェクトチーム

地域の関係者が協力し合って、
被災地での出産と子育てのための
環境を再構築する活動

p.25

震災復興応援特別賞



みやぎくりはら こどもねっとわーく

二回の地震被害を
受けた地域で、子どもたちの
居場所づくりのための
活動を展開

p.26

震災復興応援特別賞

特定非営利活動法人 移動保育プロジェクト

福島県郡山市 代表者：上國料 竜太



放射線量の高い地域から
低い地域へ「移動」。親子が笑顔に
なれる「保育」を行っています

活動内容

放射線量の高い地域から低い地域へ移動して
保育。外遊びを制限されがちな福島の子ども
たちにおもいきり遊べる場を提供しています

線量が高い地域に暮らす親子の
負担を軽くしたい

東日本大震災以降、原発事故の影響により、放射線量の高い地域では子どもたちの外遊びを禁止せざるを得ない状況が続いていました。室内に閉じ込められた子どもたちには、運動不足に伴う食欲不振や情緒不安定などの問題が表れ、一方、お母さんたちには先行きの見えない不安感とストレスが大きいのかかかっていました。そうした親子が抱える心身の負担を少しでも軽減させるお手伝いがしたいとの思いから、移動保育「ポッケア」の活動をスタートさせました。

子どももお母さんも、
笑顔を取り戻してきました

「移動保育」というのはその名の通り、線量の高い地域から低い地域へ移動して保育を行うこと。日帰り遠足のようなスタイルで県内外の公園や施設に出かけ、そこで自然体験など、子どもたちの五感を刺激するような活動を行っています。外で元気に

走り回る子どもたちはもちろん、お母さんたちの表情にも笑顔が戻りつつあり、この活動の成果を実感しています。

「移動保育」に大きな可能性を感じています

当初は被災者支援の一環として始めたこの活動ですが、「移動」と「保育」の組み合わせには、より大きな可能性があるように感じています。たとえば都市部では待機児童対策として、過疎地では世代間交流や地域活性化策として、「移動保育」を活用できるのではないかと考えており、今後は関心を持つ方たちへの情報発信にも力を入れていきたいと思っています。

名称：特定非営利活動法人
移動保育プロジェクト

活動開始：2011年7月

スタッフ：20名

連絡先：〒963-8851
福島県郡山市開成五丁目18-23 石井ビル201
TEL.024-925-0245

受賞の言葉

東日本大震災からもうすぐ丸3年になりますが、福島の放射線問題は現在も地元住民に重くのしかかっているのが現状です。世間ではどんどん風化が進む中、当活動を評価いただき感謝の言葉しか見当たりません。これからも子どもたちが心豊かに成長できる「当たり前」環境づくりに努め、少しでも多くの親子に笑顔になってもらいたいと考えています。

子育て支援活動の表彰 「震災復興応援特別賞」

震災復興応援特別賞

一般社団法人 にこにこサポート

宮城県仙台市 代表者:木皿 美奈子



子育てに関する「困った」に 柔軟に応える、ベビーシッターによる 託児サービスを行っています

活動内容

女性の子育て経験・家事能力を活かした
起業としてベビーシッターの普及を
目指していきます。
今後は年齢・職業・子どもの有無を問わず
女性支援にも取り組みます

震災の混乱の中で活動を開始

ベビーシッターによる子育て支援サービスを立ち上げるべく準備を進めていた矢先に、東日本大震災が発生しました。震災直後からサポートを求める電話が殺到。その多くは医療関係者や施設職員など、震災の中にあっても働かなければならなかったお母さんたちでした。また、活動拠点のすぐ目の前の小学校が避難場所として使用されていたため、そこに避難してこられた高齢者や外国人のサポートなども積極的に行ってきました。

「困った」の声に応えたい

私たちのメンバーは、十分な子育て経験を持つ主婦を中心に、保育士や幼稚園教諭の資格を持つ者たちで構成されているため、子育てに関する「困った」の声に対して柔軟かつきめ細かに対応することができます。仙台には、より被害の大きかった場所から移ってきた方はもとより、転勤族の方

も大勢いて、周りに頼れる人がいないケースも少なくありません。そうした方たちにとって、悩みを気軽に相談していただけるような存在でありたいと思っています。

母親支援を通じた子育てのサポート

活動をしていく上で、「母親の支援」という視点で大事にしています。子どもの健やかな成長のためには、お母さんたちが安心して暮らせる環境が不可欠だと考えているからです。そうした観点から私たちは、ベビーシッターの派遣に加えて、お母さん同士の交流の場として、カフェを併設した子育てサロンの運営も行っています。

名称 : 一般社団法人 にこにこサポート

活動開始 : 2010年12月

スタッフ : 17名 登録シッター含む

連絡先 : 〒981-0905

宮城県仙台市青葉区小松島2-3-18

TEL.022-276-1910

受賞の言葉

今年で4年目。ようやくシッターも普及し、会員さんから「ありがとう」「こんなサービスが欲しかった」との声に、団体の運営・経営の勉強は大変でも、もっと一生懸命頑張らなくちゃ!!と思っていた時の受賞だったので、びっくりしましたがとてもうれしかったです。

震災復興応援特別賞

Bond Born café プロジェクトチーム

宮城県石巻市 代表者：荒木 裕美



「お産と子育てにつよいまち」を、
みんなで力を合わせてつくっています

活動内容

多世代・多職種が集まり
「お産と子育てコミュニティカフェ」など
地域の妊娠期からの切れ目ない
子育て支援の充実を推進しています

チームの力で子育てを応援

「Bond Born café プロジェクトチーム」は、子どもを持つ親、医師、助産師、子育て関係の専門家、行政の担当者などが結集し、「チーム」としてさまざまなプロジェクトを企画・運営しています。被災地の現状と子育ての両方を知るメンバーが集まっているだけに意思決定のスピードは早く、その結束の固さとフットワークの軽さが、私たちの大きな強みです。

広がる新しい交流の輪

私たちが手がけるプロジェクトのひとつに「コミュニティカフェ」があります。震災によって多くの建物が被害を受けたこともあり、当初は会場の確保に苦労し、各地の仮設集会場を移動しながらの開催を余儀なくされました。しかし現在は、関係者のご厚意により、定常的な拠点を確保。カフェの開催日には、多くのお母さんたちが子ども連れで利用してくれています。ちなみに、ここで築いたネットワークを活かして、新たなことにチャレ

ンジするお母さんたちも現れるなど、「コミュニティカフェ」は単なる居場所以上の成果をあげ始めています。

「お産と子育てにつよいまち」を目指して

地域のニーズをよく知るお母さんたちが編集スタッフとなり、出産と子育てに関するリソースマップの作成も行っています。このリソースマップはたいへん好評で、現在は行政の協力も得て、母子手帳と一緒に配布されています。このプロジェクトもまた、交流の中から生まれた活動のひとつです。

名称 : Bond Born café プロジェクトチーム

活動開始 : 2011年11月

スタッフ : 8名

連絡先 : ☎986-0871
宮城県石巻市清水町1-5-18-501
TEL.0225-24-8304

受賞の言葉

震災により大きな被害を受けた私たちの地域ですが、だからこそ生まれた絆がBond(絆)Born(産まれる)caféプロジェクトチームです。被災地での子育て支援のニーズは刻々と変化していますが、子育てへの熱い気持ちで結ばれたこの繋がりを継続し、お産と子育てにつよいまちづくりを目指したいと思います。

子育て支援活動の表彰 「震災復興応援特別賞」

震災復興応援特別賞

みやぎくりはらこどもねっとわーく

宮城県栗原市 代表者：長柴 幸江



子どもたちの笑顔のために、
安心して過ごせる居場所や楽しく
過ごせる遊び場を提供しています

活動内容

震災後の宮城県栗原市の子どもたちのために、子どもの居場所・遊び場づくり、読み聞かせ、クラフト、子どもまつりなどを企画し活動しています

震災で傷ついた子どもたちの笑顔を取り戻すために

宮城県栗原市は、ここ数年の間に二度の大きな地震に見舞われました。一度目は平成20年の岩手・宮城内陸地震、二度目は東日本大震災です。地震による被害をもっとも受けたのは子どもたちでした。ここ栗原市でも、町から子どもたちの元気な声と笑顔が失われました。復興に追われるなかで手の届きにくなる子どもたちの支援活動を、子どもたちの心に寄り添った形で、私たちは日々行っています。

子どもたちを楽しませるためのイベントが盛りだくさん

子どもたちのための居場所・遊び場として、市内の2つの地区で「くりはらあそびランド」を定期的で開催。加えて他の地区でも要請に応じて、読み聞かせや紙芝居、人形劇や工作などの楽しい催しを実施しています。「くりはら子どもだがしや」を開催

したときには、手づくりのイベントながら200人を超える子どもたちが集まり楽しんでくれました。

困ったときには助け合う 「ちょうどいやんべな関係」

当団体のメンバーとしてさまざまな方が活動に携わっていますが、各種イベントの開催時には、子どもたちの保護者も参加し熱心に手伝ってくれます。この地域は昔から、何かあった際にはみんなで助け合う意識が高いところで、そうした関係を「ちょうどいやんべな関係」と呼んでいます。これからも「ちょうどいやんべな関係」を大事にしながら、子どもたちのための活動を続けていきたいと思っています。

名称 : みやぎくりはらこどもねっとわーく

活動開始 : 2008年12月

スタッフ : 7名

連絡先 : 〒987-2308

宮城県栗原市一迫真坂字高橋9番地3

TEL:0228-52-2010

受賞の言葉

受賞のご連絡をいただき、私たちの地道な活動に目を向けていただいたことが本当にうれしく、涙が出ました。子育ては行政だけが行うことではないと思います。その地域に住むたくさんの人たちが一緒になり、協働して活動をしています。子どもたちの笑顔がいっぱいの栗原は、そこに住むすべての人が輝いて生活していける町だと確信しています。

被災地で立ち上がったリーダー —— 復興に“今”必要なこと ——

東日本大震災の発生から3年がたとうとしています。

このページでは、被災地で活動を続ける受賞団体のリーダーの方から、これからの復興に向けて、地域で求められている本当に必要なことは何なのか、お話を伺いました。

震災復興
応援
特別賞

復興支援事業をきっかけに、 継続的な事業へ

特定非営利活動法人 移動保育プロジェクト
代表: 上國料 竜太さん



この活動を開始したきっかけは、原発事故発生直後の子どもたちやお母さんたちの不安を軽減することでした。しかし、実は震災前より子どもたちが体験を通して気付きや学びを得る機会が少ないことも非常に問題視していました。活動を継続した結果、最近では保護者の方々も放射線に対する不安だけでなく、そのことに価値を感じてくれるようになってきたように感じています。

今でも、福島県では外部の方々からさまざまな支援やサービスを提供していただく機会が多くあります。大変ありがたいことではあるのですが、それが当たり前になってしまうことには危惧を覚えます。本当の意味で復興するには、外部からの支援に頼ることなく受益者自身で自立した仕組みを創り上げることが本来の姿であると考えているからです。

これまでには、震災復興支援の助成金なども受けていますが、本当の意味での復興を進めるためには、そうしたお金は事業の基盤づくりのための資金として捉え、継続的に事業を運営していくことが大事だと思っています。

震災復興
応援
特別賞

「女性の子育てと家事能力を 活かした起業」復興＝働くことと信じて

一般社団法人 にこにこサポート
代表: 木皿 美奈子さん



震災以降、仕事を発生させて報酬を支払うということにこだわり続けてきました。生活環境の変化によって働かざるをえない主婦が増え、にこにこサポートには、子どもを託す人と同じ数だけ「働かせてください」と問い合わせがありました。震災後、働く意欲を無くした世帯がいるのも事実ではありますが、それでも復興＝働くことと信じて、女性が安心して働ける雇用の場を創ることが私たちの仕事です。

震災から3年。ベビーシッターの普及・女性の就労支援のために法人化し、助成に頼らざるをえない子育て支援から、本当に地域に必要とされる子育てサービスへと事業を展開していきます。プレッシャーもありますが、『にこサポ』を利用するお母さんや子どもたちの笑顔、働く人たちの笑顔に支えられています。

子育てで経験を活かし、仕事をして収入を得る。幅広い世代のお母さん同士のつながりから生まれたコミュニティビジネスが被災地だけではなく各地に広がり、日本全体が元気になることが本当の復興だと信じ進んでいきます。

女性研究者への支援 「スミセイ女性研究者奨励賞」

井岡 瑞日

立命館大学・京都学園大学(非常勤講師)

研究テーマ

19世紀フランスの家庭教育像 — 女性向け雑誌メディアを手がかりとして —

内容

今日、家庭教育は個々の裁量に任される私的な行為であり、学校教育とは根本的に性質が異なるものとみなされている。では、近代フランスにおいて、学校教育を前提としながらも、それとは性質を違える存在としての家庭教育が自明視されるようになったのは、どのような歴史的経緯からか。本研究は、この問いに迫るため、女性向け雑誌メディアを史料として、学校教育の普及を背景とした家庭教育の変容過程を明らかにすることを目指す。



受賞の言葉

この度は、助成対象に選んでいただきありがとうございます。大学院の博士課程に進学した年に出産した娘はもう四歳になりました。私にとって、研究も子育ても、時に困難で孤独な作業であり、その場にうずくまったことも何度もありました。けれども、得られる喜びも大きいからこそ、何とかこれまで続けていくことができました。本助成を糧に、我が子の成長に心穏やかに寄り添いながら、博士論文を完成させたいと思います。

鄭 智允

公益財団法人 地方自治総合研究所

研究テーマ

災害廃棄物の処理をめぐって

内容

東日本大震災で膨大な災害廃棄物が発生した。本研究は、その処理の方法について、国と地方の役割分担と財政措置をめぐって講じられた施策、処理プロセスの検討を行った上で、被災自治体への調査等を通じて災害廃棄物を安全かつ迅速に処理するための提言を行うことを目指している。



受賞の言葉

「日本という外国」で子育てをする難しさに加え、結婚とは家庭に入ること＝研究をやめること、という日本での古くからの意識もあり、研究環境はますます厳しくなっていました。そんな中でも後悔しないよう、できるところまでやる決意で取り組んできたところ、この助成を受けることができました。応援していただけて本当にありがたく、素直に嬉しいです。希望ある社会を将来世代に手渡すため、より一層研究に励みたいと思います。

大門 碧

京都大学 アフリカ地域研究資料センター

研究テーマ

アフリカ都市のポピュラー音楽消費からみる 若者たちの社会関係:ウガンダの例

内容

現在アフリカ都市では、若者たちが自由にポピュラー音楽を入手・聴取し、製作や音楽を使ったパフォーマンスに取り組んでいる。本研究では、彼らの音楽消費の実態をとおして、彼らと地域社会との関係性を明らかにする。先行研究では「抵抗」としてみなされることの多いアフリカ都市の若者の音楽消費を再考し、彼らの社会関係があらわれる場としての音楽消費を提示したい。



受賞の言葉

これまで調査を続けてきたウガンダで出会った夫とのあいだに娘をもうけ、自分が選んだ道とはいえ、子育てと研究との両立に苦しんでいたときに、受賞の連絡を受け、研究だけでなく自分の生き方も肯定していただけたような気持ちになりました。これからの研究は、独り身だったときとは異なる態勢になりますが、娘とともにいることで新たにみえてくる調査地の世界を、研究成果としてしっかり発表していきたいと思っております。

中野 千野

早稲田大学大学院 日本語教育研究科

研究テーマ

複数言語環境で成長する子どもの主体性を生かす 日本語教育の研究

— ライフストーリーの相互構築過程に着目して —

内容

国内外の複数言語環境で成長する子どもたちの中には言語学習に困難を感じる子どもも多く、例えば海外では、「継承語」や「母語」として日本語を学ぶ子どもが日本語学習をやめてしまうことも少なくない。その多くは「個人の問題」として片づけられる傾向にある。

本研究のテーマは、複数言語環境で成長した人の「生」と「ことば」に注目し、子ども自身の生活世界を明らかにするとともに、問題解決に向けた提言を行うことにある。



受賞の言葉

助成対象に選んでいただきありがとうございます。幼子を抱え、仕事と研究を継続する生活は、その成果の見えにくさもあり、周囲から理解を得にくい状況にありました。子どものことばの研究に携わっているにもかかわらず、自分の子どもや研究には向き合えないという状況に葛藤がありましたが、このたびの受賞で、研究を紡いでいくことができます。それゆえにこそ、研究成果を未来の子どもたちのために役立てたいと強く思っております。

女性研究者への支援 「スミセイ女性研究者奨励賞」

南郷 晃子

神戸大学大学院 異文化研究交流センター

研究テーマ

武家権力と「女」の崇りをめぐる説話の考察

内容

本研究は武家権力と説話の関連を考察する研究の一環として、「女」の崇り説話の考証を行うことを目的とする。近世期における「女」の社会的立場を踏まえた上で、崇りが現実の社会状況を変容させるものとして作用する説話の意味構造を、説話成立の過程、時代状況とともに明らかにし、説話における「女」の意味の捉え直しを図る。



受賞の言葉

この度は、助成対象にお選びいただきありがとうございます。日々パワーアップする男子3人と格闘しながらの研究生活は、思うようにいかない日々と、それに納得できない自分の器の狭さとの葛藤の連続です。受賞は、このような私の生き方丸ごとを応援していただけることのように感じ、大変勇気付けられています。助成期間を満了するものにし、同じく葛藤する女性へのエールとすることが、与えられた役割と身を引き締めています。

二村 淳子

東京大学大学院 総合文化研究科

研究テーマ

描かれた女性像

— 20世紀初頭の東アジア人画家による女性表象 —

内容

本研究は、20世紀初頭にヨーロッパの「美術」という概念に出会った東アジアの画家たちが、いかに女性を表象してきたかを探る。従来は、西洋画家の男性中心の世界観を日本人画家が受容したと解釈されてきたが、東アジア固有の文化を加えた「創造的な翻訳」を試みた可能性は否定できない。中国、ベトナム、日本等の画家たちを取り上げ、彼らの作り出していた世界を検証する。



受賞の言葉

まず、なによりも関係者の方々に深く感謝いたします。子育てと研究(とりわけ人文系)の両立が非常に困難な状況にある日本において、このような助成金制度があることは素晴らしいことです。人文系研究は、技術や経済と違って実益にすぐには結びつきません。しかし、これから先の社会を見つめ、考えていくうえで、問題や解決の糸口を提起することはできます。未来を切り開く研究者を目指し、邁進します。

能美 由希子

筑波大学大学院 人間総合科学研究科

研究テーマ

難聴児が通常学級で学ぶための学習支援員の役割 — 音声文字通訳を中心に —

内容

通常学級で学ぶ難聴児が効果的に学習し、学級適応を図るためには、音声情報を文字に変えて提供する音声文字通訳が必要となるが、本研究では、学習支援員が難聴児の隣席で支援を行う際の効果的な情報伝達方法を探る。すでに5年にわたり実際の授業での支援状況を録画・記録し、分析を進めており、授業の流れを知らせるなど単なる通訳以外の支援が必要であることを明らかにする。



受賞の言葉

この度は助成対象に選んでいただき、ありがとうございます。妊娠前は子育ても研究も仕事も頑張りたいと意気込んでいましたが、慣れない子育てに産後うつと父の還浄が重なり、ただ生きるだけで精一杯のしんどい日々を送っていました。そんな中でも研究は諦めきれずにいたので、助成決定は力強く背中を押された気持ちでとても嬉しいです。この嬉しさを大切にしながら、少しでも多く現場に還元できるように研究を進めたいと思います。

日笠 晴香

東北大学大学院 文学研究科

研究テーマ

医療における意思決定モデルの構築

— 自律とQOLの考察に基づく臨床倫理的研究 —

内容

現在、医療において患者の自己決定を尊重することが原則となっているが、現実には患者の意思に従うことが患者の利益に反すると考えられる場合も少なくない。患者にとって最善の選択をすることは、家族や医療従事者にとっても困難な問題となりうる。本研究は、意思決定において尊重されるべき要件を考察し、医療現場で適切な意思決定が行われるようになることを目的とする。



受賞の言葉

助成対象に選んでいただきありがとうございます。私も夫も研究者を志すなかで、生計を立てながら研究と子育てを両立させることが常に困難な課題となっています。今回の受賞によって、女性として研究か子育てかの二者択一になるのではなく、どちらも諦めないための大きな支えをいただきました。ずっとご指導くださっている先生方と研究仲間へ感謝し、社会に寄与する研究となるよう家族とともにさらに邁進したいと思っています。

女性研究者への支援 「スミセイ女性研究者奨励賞」

八木 瑞香

新潟大学大学院 現代社会文化研究科 共生文化研究専攻

研究テーマ

ボードレールの散文詩における 新しい詩的主体の変革について

内容

19世紀中頃のフランスにおいて、詩と言えば韻文詩であり、散文は日常的なもので芸術の範疇ではなかったが、ボードレールはそこから脱却し、「散文詩」という未知のジャンルに踏み出した。本研究では、それまでの韻文詩とは異なる「散文詩」の詩的主体がどんなものであるかを明らかにし、ボードレールが「散文詩」に移行せざるを得なかった背景も明らかにすることを目的としている。



受賞の言葉

受賞のご連絡をいただいたときは大変驚き、信じられませんでした。本当にありがとうございます。研究を続けることは、経済的に無理であるにもかかわらず、理解、応援してくれている家族にまず感謝し、この助成によって得られるであろう気持ちのゆとりを、家族のために返していきたいと思います。また厳しくも温かくご指導くださる先生方や研究科の皆のおかげで研究を続けることができています。今後も身を引き締めて頑張りたいです。

山口 えり

早稲田大学 重点領域研究機構 東アジア「仏教」文明研究所

研究テーマ

日本古代の国家と災害認識 — 天体観念と祈雨儀礼から —

内容

日本の古代から中世への転換は、政治史だけでなく、日本人の観念に関わる文化論・災因論からの検討も重要である。古代王権が重視した祈雨儀礼を探ると、災因の捉え方は7～8世紀は「天皇の不徳」、9世紀は「祟」、9世紀後半には「理運」という“天体の動きが社会動向を規定する”思想へと変遷し、転換期と重なる。この「理運」の登場と変容を追跡し、古代から中世への展開を解明する。



受賞の言葉

助成対象としてご支援をいただきますこと、大変光栄です。3人の子どもたちに囲まれ、幸せながらも、この数年は研究が計画通りに進まない状況に焦りを感じながら過ごしてきました。研究をあきらめそうになる私を励まし、広島から頻繁に助けにきてくれる夫をはじめ、応援してくれる家族、私の状況を理解し、温かくご指導くださっている先生方、そして、子どもたちがお世話になっている保育施設の先生方のおかげと感謝しております。

横田 和子

早稲田大学 文学学術院

研究テーマ

存在論的アプローチによる 言語意識教育の実践をめぐる臨床的研究

内容

多言語化・多文化化が進む地域社会においては、学習者の言語の操作能力の向上のみならず、多様な言語能力をもつ他者といかなる関係を築いていくかという共生と共同体のための言語教育を構築する必要がある。本研究では異質性の排除や過剰な同質性を求める子どもたちの関係性のありように教育課題があると考え、存在論的アプローチによる新たな言語意識教育の実践を試みる。



受賞の言葉

子育てと研究の両立に苦勞してきたこともあり、今回の受賞は本当に心強く、励みに感じております。また、周囲の支えなくして今回の受賞もありませんでした。改めて感謝の気持ちでいっぱいです。女性の多様な生き方を認める社会を築いていくうえで、こうした助成の存在は数少ない希望です。今後、研究を深化させることで、子育て中の女性研究者の活動の幅の広がりにつながればと思います。このたびは本当にありがとうございました。

大学のご担当者へ聞く

女性研究者の置かれている現状やその支援の必要性について、
日頃から研究者と接している、大学のご担当者にお話を伺ってきました。

早稲田大学男女共同参画推進室 ご担当様

女性は、結婚や出産・子育てといったライフイベントによって、研究を中断しなければならないことがあります。女性研究者にとって最も大きな問題は、そのためのブランクによって十分な実績が積み重ならなかったり、復帰の際の受け入れ先が見つからなかったりすることではないでしょうか。

一方で、研究には、性別を含む多様なバックグラウンドや経験をもつ研究者らによる多角的な視点からの考察が必要だと言われています。女性であることや子育ての経験が、さまざまな研究分野に新たな切り口を提供し、さらなる深化が得られるかもしれません。

このプロジェクトは、そうした女性研究者を支えるものとして、研究も出産もあきらめなくてもいいというメッセージを発信してくれています。こうしたメッセージが世の中に広がっていくことで、研究の世界にこれまで以上の変化が起き、大きな成果をもたらすと同時に、よりよい社会につながっていくことを願っています。

先輩ママ研究者に聞く

第1回受賞者

多和田 真理子

(飯田市歴史研究所調査研究員)

研究テーマ: 明治期の小学校設営・運営と地域構造



助成が決まるまでの環境・決まってからの変化

本事業で助成をいただく前までは、研究と育児の両立に悩んでいました。とくに子どもが小さいうちは、育児のために研究に充てる時間や活動範囲が制限される状況でした。子どもが度々病気にかかるので、研究は自分の趣味、ワガママなのではないかと悩んだこともあります。

そんなときに、研究も子どもも大切にしたいという思いを、このプロジェクトに受けとめていただけたということが、精神的な安定につながったと思っています。

研究の成果

本プロジェクトの助成対象となった研究をまとめ、2009年8月の飯田市地域史研究集会において成果発表を行うことができました。また、論文を『飯田市歴史研究所年報』8号(2010年8月発刊)および『國學院大學紀要』第50巻(2012年2月発刊)に投稿し、掲載が認められました。

女性研究者へのメッセージ

女性が育児をしながら仕事を続けることについては、周囲の理解を得やすくなってきており、支援も拡充しつつあります。その一方、研究活動の意義、つまり「何のために研究をするのか」ということに対して、社会の目は年々厳しくなっているように感じます。

とくに女性にとっては、子育ての時期が、研究者として成果が出る時期と重なってきます。常勤職でないと認可保育園の利用が難しい場合もあり、なかなか研究者として職につけないもどかしさと、子育てにかかる負担の大きさに悩むことも多いと思います。そんなときに、子育てと研究の「どちらか」ではなく「どちらも」選べるようなフォローがあれば、もう少しがんばってみようという気になれます。

私たちが経験をふまえて意識的に考え、発信していかないといけないのは、「(育児をしながら)研究をすることの意義」ではないかと最近強く感じています。その点でも、子育てと研究「どちらも」対象としている本プロジェクトのあり方は、女性研究者だけでなく、働く女性一般の問題を解決していくうえで重要なヒントになるのではないかと思います。



第4回(2010年度)受賞者最終報告

第4回受賞者の方から、助成期間を終えて
研究環境や子育て環境がどのように変わったのかをご報告いただきました。

稲山 円

東京外国語大学大学院



育児と研究の両立を取り巻く環境について

今回の助成では助成金を大学の授業料に充てることが認められているため、大学院へ復学することができました。また、文化人類学では海外での現地調査が重要視されますが、この助成によって子どもを現地に連れて行けるようになり、研究を進める大きな後押しとなりました。

大村 華子

関西学院大学総合政策学部

研究継続で得た成果

助成をベビーシッターに利用することができたおかげで、初期段階の研究成果を博士論文にまとめることができました。また、就職活動に集中して2013年4月から関西学院大学の専任講師となることができたのも、助成のおかげだと思っています。



崎原 千尋

沖縄キリスト教学院大学および琉球大学非常勤講師



研究継続の中での生活環境の変化について

受賞を機に、これまで以上に地域貢献活動に参加することができました。個人の研究の深化に留まらず、同じ女性研究者同士の研究会や共同プロジェクトへ継続発展していくことができました。沖縄における若手女性研究者への期待が高まっていることを実感しています。

塩谷 暁代

京都大学 アフリカ地域研究資料センター



研究継続の中での生活環境の変化について

家族は以前からとても協力的でしたが、受賞を機に、社会的にも評価された「仕事」として研究に携わることに対してますます理解を示してくれるようになりました。小学校に通う長男と次男は、今では家事も分担して手伝ってくれています。

内藤 陽子

東海大学政治経済学部 経営学科

研究継続で得た成果

これまでは周りの研究者に比べてなかなか成果を出せない状況でしたが、助成のおかげで今までなかなか着手できなかった大規模な調査に取り組むことができ、助成1年目と2年目に、それぞれ別の学会誌に投稿論文が掲載され、大きな成果となりました。



二階堂 祐子

明治学院大学大学院



育児と研究の両立を取り巻く環境について

助成のおかげで研究活動への精神的、経済的負担が軽くなり、子育てと研究活動のメリハリをつけやすくなったことが一番大きな変化でした。経済面だけでなく精神面でも研究活動の大きな支えとなり、2年間で成果を出すことができました。

ハタエワ・タチアナ

北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院



研究継続で得た成果

私の研究は現地調査なくしては成立しないものですが、助成によって3回の現地調査を行うことができました。自費で賄っていた頃と比べると、現地調査の範囲が大幅に広がり、貴重なデータを多く収集することができ、審査論文と2回の学会発表を行うことができました。

バロリ・アルバナ

新潟大学大学院現代社会文化研究科

育児と研究の両立を取り巻く環境について

博士課程1年目に子どもが生まれ、研究と子育ての両立がとても大変な時期でしたが、助成を受けたことによりバランスのとれた生活環境に変わっていきました。この変化に子どもたちも気づき、ポジティブな意味で「ママ、なんかちがうね」と言ってくれるようになりました。



ミヤグマル・アリウントヤー

一橋大学社会学研究科



研究継続の中での生活環境の変化について

助成によって経済的な負担が軽減されたことで、夫やお互いの両親の理解が一層深まりました。モンゴルから母が来日し家事や育児を手伝ってくれたおかげで、より多くの時間を研究に費やすことができました。助成によって家族の理解が得られたことは本当に大きな成果でした。

第6回受賞者のご紹介

第6回「未来を強くする子育てプロジェクト」の表彰式および懇談会を、
2013年2月4日(月)ホテルニューオータニにおいて開催いたしました。



受賞者と選考委員の記念写真



お子さまと一緒に



託児ルームもご用意いたしました



懇談会の様子

「子育て支援活動の表彰」

第6回受賞者の近況



石樽の里コミュニティ

三重県 代表者:森 清光

〔受賞で変わった環境〕 **副賞で絵本を100冊購入しました**

学校の地域交流ゾーンに、今回の表彰状と表彰式の写真をパネルにして常設展示し、地域住民や学校関係者、視察や各種行事で訪れる方などにご覧いただいています。その反響は大きく、誇りと励みになっています。副賞で100冊の絵本を購入し、図書ボランティアによる読み聞かせをさらに充実させました。



特定非営利活動法人 しずおか環境教育研究会

静岡県 代表者:大畑 実

〔受賞で変わった環境〕 **受賞が大きな自信となりました**

未来賞という賞をいただき、長年地道にやってきた活動を評価していただけたことは、私どもスタッフの大きな自信となりました。また、参加者や会員の皆さんをはじめ、地域の皆さん、アドバイスをくださる先生方、行政や企業の方など、たくさんの方々に支えられてこの活動を続けることができるのだと、改めて思うことができました。

「スミセイ女性研究者奨励賞」

第6回受賞者の近況



田川 麻央

お茶の水大学大学院 人間文化創成科学研究科
比較社会文化学専攻

研究テーマ | **第二言語での日本語学習者の読解過程
日本語学習者の読解過程における要点関係図作成活動の役割**

〔受賞で変わった環境〕 **子どもが研究を応援してくれています**

受賞後、多くの方からお祝いの言葉とともに励ましの言葉をいただきました。子どもは3歳になり、お母さんが忙しくしているのを少しずつ理解し、応援してくれるようになりました。先日、博士論文審査会の朝も、「ママがんばってね。私は保育園がんばるよ」と励ましてくれました。今後も、子どもとしっかりコミュニケーションをとってがんばっていきたいと思っています。